は、凡そ年産五百萬バーレルの石油を産出してゐる。

之を補ふ僅少の油はバーバドス、キューバ、サント・ドミンゴ島より出てゐる。少量の滲油はコスタリカと之を除く中央アメリカ地方及び西印度より産するが、トリニダッド以外に、中央アメリカ又は西印度諸島に大油田の發見される豫想は難しい。トリニダードの地質はヴェネズェラ本土と類似して居り、油田の位置が便宜なのと、有名なアスハルトを出す、ピッチ・レークのあるため漸ては開發計畫を擴張せんとして活躍中である。（未完）

東ピレネーの春（二）

小牧實繁

四月五日、金曜日。午前五時起床と云ふから凄い。六時十八分モン・ルイ驛發、テー河の谷をルーシィヨンに降る。我等の乘込んだ借切電車は可なりの勾配を、うねりうねつて降るのである。セジュルネの鐵橋（Séjourne）とかジスクラールの橋（Giselar）とか見事な工事が嶮しい狹い谷に架せられてゐる。我々はその上を通るのである。

六時五十九分チューエ（Thuès）驛着、カレンサ（Carença）の峽谷を見る。片麻岩、千枚岩、硬砂岩、輝綠凝灰岩等の岩石を切つた細い峽谷であるが兩壁は文字通りの絶壁で中腹に道を作ることが出來ず、谷底と谷壁との僅かの間に作られた細徑を傳つて行くのである。

此の峽谷はテー河の支谷をなし、テー河の斜面を垂直に切り込んでゐるのであるが、之れは

コンフラン（Conflent）の地盤が全體として隆起し河川の回春したことを證する順應峽谷とも稱すべきものである。所が此の地盤の變位は大體三回に亘つて繼起したので下刻作用にも三輪廻が認められそれが三水準面に代表せられてゐる。最上位は前記フヌイエーの輪廻に對應してゐるとのことである。岩石三個を採集する。

巴里の地理の學生には岩石の知識は殆んど無いと言つてよい。片麻岩も硬砂岩も千枚岩も殆んど知らぬ。私の不充分な知識を以てしてもそれ位は解るのでこれは何、あれは何と教へてやるとふーんと感心してゐると云ふ有樣である。

來た道を辿つて驛に歸り九時十二分チューエー發、ヴィルフランシュ（Villefranche）に向ふ。

チューエーの下流に於てテーの谷は急に廣まつてオレット（Olette）の盆地を作る。オレットと、ヴィルフランシュの間では既に地中海沿岸性植物が現はれるが尤も形は尙矯小である。

九時五十四分ヴイルフランシュ（Villefranche de Conflent）で下車、コルネイラ（Corneilla）の御寺を訪れる。小さい御寺ではあるが美しいことは此の上ない。建築の樣式はロマンである。殊にその入口の門の柱にはセレー（Céret）の薔薇色大理石を用ひて居るのが美事であつた。寺全體が錆の着いた眞珠と云ふ感じを與へるのであつた。寺の周圍には非常に古い狹い二階建の家があり面白く眺められた。寺の傍の古めかしい家の土產物屋で繪端書などを買ふ。

足自慢の連中は尙ヴェルネー・レ・バン（Vernet-les-Bains）と云ふ鑛泉の湧く所まで蠟足を延ばしたが、ちやんと約束の時間には歸つて來る。然し流石に皆んな汗をかいてゐる。ヴィルフランシュのビュフェーに入つて最後の連中が歸り着く迄の時間を端書など書いて過し皆んな揃つて中食する。紅色の大理石採集。

コルネイラの谷では谷底の濕潤な所が牧場となつてゐる。又所々牧場が灌漑されてゐる所を見る。所によつては林檎や梨やの果樹園になつ

て居る。日當りのよい斜面は無花果や葡萄の畑に利用せられてゐる。そして谷底の綠の牧場と日當りよい石灰岩の谷斜面と兩者の對照は可なり明確なものがある。

一時三十三分ヴィルフランシュ發。コンフラン及びリヴィエラル(Rivièral)を經てペルピニャン(Perpignan)に向ふのである。

ヴィルフランシュから下流では谷が更に廣まるが、前記浸蝕輪廻の第三の水準面(一〇〇米)がヴィルフランシュ及びプラード(Prades)の邊で明瞭に認められる。そして谷は開けて全く地中海沿岸性の景觀を呈するのである。至る所灌漑用水路が走り之れによつて耕作は中々集約的に行はれてゐる。

プラードの邊では可耕地面積が少ないので其處の耕作は實際園藝耕作(jardinage)であると言へる。輪作は七年を周期とする。プラードがその農業の中心で地方唯一の市場であるが、唯次第に衰萎の傾向があると。

土壤が豐饒であるばかりでなく地下の富源も少くはない。カニグ(Canigou)の山腹の北斜野には鐵鑛を產する。小規模に開發せられ一九二七年の產額は二五萬噸であると。

プラードの下流で谷は更に廣くなる。此所がルーシィヨンの入口と言ふ譯である。電氣鐵路はプラタヌスの樹蔭を行く。果樹園、葡萄園、蔬菜園が多く其處にテー河の下谷リヴィエラルの野が開けるのである。

村落は集村をなして相續き糸杉の木立が平面の中に斑點を描く。南の山々はアルベール(Albères)である。

二時四十三分ペルピニャン驛着。今夜の宿と定められたペルピニャンの中學校に荷物を置き縣農事試驗所の所長スールサック氏(Soursac)の案內で郊外サン・ジャック(Saint-Jacques)の農園を見學する。此所は近年益々發達する果樹蔬菜栽培の中心であるが所長の懇切な說明があるので誠に有益な見學である。

此の地方は春の初め北風が強いが南國であり暖い、現にペルピニャンの町の植物園には多くの熱帶性の植物棕櫚や蘇鐵が繁茂してゐる有樣である。それで防風の設備と灌漑とさへ工夫すれば果樹は早く實のり蔬菜は早く芽を出す。そんな條件の下に發達したのが此の地方の果樹蔬菜の栽培業である。そんな譯で防風の林や簀垣が實際立派に物々しい位に造られてゐる。土壤は大分砂地がかつてゐるがその間に灌漑用水路を引き、畑の中に又細い何本かの溝を引いて適當に灌漑してゐる。こんな風にやるんだとて老農夫とその子とが鍬で土をかいて水を通して見せて呉れる。土地は全く平坦であるから各畔へ都合よく流れて行くのである。幹部のマットン君（Matton）經濟地理を專門にして居る精か此の農業經營に大なる興味を覺えたものと見え、切りに根掘り葉掘り所長や百姓に物を聽いてゐる。此の事業を經營してゐる地主は勿論農民も中々富裕であると言ふ。

此の農業が新らしく開けたものであるため此所には古い田舍の村の趣きはないが新村の鷹揚さと活氣が横溢してゐる。耕作栽培の上のみならず蔬菜果實の發送に就いても中々多忙であるらしい。籠や箱の類が澤山に見受けられる。そして前庭には多く趣味の草花などを植ゑてゐるが日本的のものの多いのが懷しく眺められた。

市内を散歩しながら中學校に歸る。熱帶植物の多いそしてプラタヌスの並木道の素張らしい植物園、赤色の物さびた舊城門（Castillet-Notre-Dame）、アラゴー（Arago）の銅像のある廣場、裁判所、古めかしい建物の市役所など云ふものが印象に殘つた。殊に舊城門なるものは古ペルピニャンの舊城壁の位置を示す記念物であるが頗るつきの古建築で新式都市の中に斷然異彩を放つてゐた。

今夜の宿はペルピニャンの中學校である。所がその寄宿舍なるものがとても素張らしいものなんである。休暇で生徒が居ないからと言ふこ

とは辯解の理由にはならない。塵っぽい廣い室の中に頗る時代ものの怪しげな寢臺がずらり、それから洗面所が室の中央に數個これもずらりと並んで居る。心なしか水さへ不潔らしく思はれる。流石强氣の學生達も悲鳴を擧げた。中には校長と縣知事の監督について非難を初めるものすらある。

數人の有志がホテルへ泊らうと言ふもので一部のものは Hôtel du Nordet de Petit Paris と言ふのに室をとる。夕食丈けは皆んな一所に學校でとる。

食後學校を出て繪葉書を買つたり散歩をしたりした揚句思ひ〳〵のカフエに入つて地酒を味はふ。山の名をとつたカニグと言ふ無色の酒が强くて甘かつた。和蘭の留學生某君が切りに御國なまりの佛蘭西語で氣焰を擧げる。フロマショ、マトロショフ等の佛蘭西人學生は聽き手だ。ぶつてり肥えた佛蘭人の女學生と途中から一行に加はつた葡萄牙生れの地理學徒某君、これは英獨佛西何語でも自由に話す、そして日本語まで覺え度いと云ふ快活な美男子であつたが、それ等が仲善く話す。

四月六日、土曜日。五時半起床、七時ペルピニャン驛發、仝十七分エルン（Elne）着、サント・セシル（Sainte Cécile）の寺院を訪れる。「起きた頃は大きな雲が出てゐて降るかと脅かされたが北風（tramontane）が吹くと間もなく霽れた。ペルピニャンからエルンまでは唯坦々たるルーシィヨンの平地で、之れは古への地中海の一灣入が部分的にプリオシン期の海成層で埋められたものだと地質學者は言ふ。其處は今良質の葡萄を產する段丘をなしてゐる。そして尙下段に洪積期の河成堆積層があるのであるが一帶見渡す限りの葡萄畑である。

エルンは昔しのイリベリス（Illiberis）で古い城砦都市であり、十七世紀迄ルーシィヨンの宗教上の首都であつた。驛前の廣場から共同の洗濯場のある所や野菜市場の廣場を經てバラゲ門

(Porte Balaguè) と稱する舊城門を入ると地盤は少し高見になつて其處に伽藍が立つてゐる。

其の建築は一種特別のもので而も美しく中世建築樣式の主潮から遠のいて極めて徐々に發達したカタローン (Catalogne) のロマン式建築の立派な標本となつてゐる。其の北側に僧庵が附隨してゐるがこれこそ實にロマン風建築の寶石と云つても過言でない。天井は火災後ゴチク風に修理せられてゐるが、其の壁その柱その斗などに中世初期から十四世紀に至る宗教建築の精華を見るのである。幾回廻つて鑑賞してもし切れない思ひをする。スルデイヤー君の說明がある。

塔上に登る。ルーシィヨンの野が眼下に展開する。それは一面の葡萄畑である。併しながら蔬菜の栽培が、殊に谷の中では益々盛になつて段々葡萄畑を侵略しつゝある。そしてエルンはその重要なる中心となつたのである。現に驛の近くには廣い青物市場があるのである。

村々は集村で平野の中でも比較的高い地點に立地してゐる。

景色は中々美しい。そして殊に自分の眼を喜ばしたものは實に生れて初めて見る地中海の遠望であつたのである。白く青く輝いてゐる海。私は思はず叫んだ。地中海だ！　足許にはオリーヴや糸杉の木立が御寺の周圍に風致を添へてゐる。

早く海に出度いと云ふ希望は一行の何人もが懷いた共通の考へであつたらう。足は驛へと急いでゐた。

九時二十二分エルン驛發コリウール (Collioure) に向ふ。アルベールは屹然として平地に聳えそして又深く地中海に沒する。汽車は其の間を縫つて南向するのである。

九時五十二分コリウール着、此れは古い城砦の脚下に横たはつた古くからの港であるが、港の見學なんか實際上ったり屋だ。海の空氣にすつかり愉快になつた連中は皆んなのろのろと樂

しみながら歩いてゐる。避寒客であらう年とつた女の白い靴を穿いたのが繪を描いてゐる。そんなのどかな景色を見ては地理も何もあつたものではない。港の人達と來たら更に呑氣だ、地面や石などに腰を下して他愛もない世間話しに耽つてゐる。春は長閑かだ。いくら團長メー君が急いで呉れ〳〵と言つても誰も聞かぬ。聞けないんだ。直ぐ道草を食ふ。海岸に出て礫を拾つたり水をいぢつたり等。古めかしい燈臺の樣な圓筒形の望樓を通り岩に立つて浪と戯れ、それから突堤の尖端迄行くのにいくら時間がかかつたかしら。

砦の下を通つて街道に出で徒歩ポール・ヴァンドル（Port-Vendres）を指す。汽車に乘つた者は殆んど無かつた。皆んな愉快に歩き出す。幸北風が後ろから吹いて呉れるので風に壓されて行く樣なもの、地中海の澄み切つた空氣を滿腔に吸つて。山の斜面には葡萄の段々畑が非常に多く葡萄酒の液體の中に漬つてゐる樣な氣すらする。

ポール・ヴァンドルは海岸を綺麗に石畳みにした堂々たる港で、港としての規模に於いて設備に於いて斷然コリウールの比ではない。大船が横づけられ輸出の葡萄酒樽が澤山に積まれてゐる。尤も此れは新港の方で之れと幷んで舊港もある。そして裏山は依然として一面の葡萄の段畑である。

十二時六分ポール・ヴァンドル驛發全十九分バニウル（Banyuls）着。此所で葡萄酒やバナナ等多量の兵糧を仕込んで、アルベール登りにかかる。

初めはそんなに急坂でもない。又幸に風もそう強くはないので皆んな愉快に歩き出し、やがてオリーヴの林の中で冷食をとる。フロマジョ君の開けた鰛の罐詰は美味かつた。所が大分午前中の運動がよかつたのと空氣が變つたのとで僅か位の辨當では腹の蟲が承知せぬ。最後のパン切れを食つて仕舞つて、一つは好奇心からで

もあるが丁度橄欖の實がなつてゐるので食つて見ると澁かつた。

綺麗に辨當がらを始末して、愈々昇りにかかる。

上るに連れて樹木は段々なくなる。さう高いと云ふ譯ではないのに樹の無い所を見ると、風の爲樹は育たぬらしい。そして事實何と云ふ强い風であらう。容赦なくびゆー〳〵と吹く。足許は谷であるのに時々身體を吹き飛ばす樣なのが來るから危險千萬である。異國の谷底で御陀佛になつては見つともないと思ふと自然に脚が踏ん張れるが、身體を大分斜めにしないと立つてられぬから厄介である。第一疲勞が甚だしい。皆んなも相當困つて居るらしく時々悲鳴が擧がる。要愼深いのは突風の强いのが來る度に僅かの岩蔭に隱れ〳〵て昇つて行く。先頭と後尾との間には既に非常な間隔が出來る。中間に居てももう先頭を見失つてゐる。心細いと思つてゐると又惡魔の乘りかかつてゐるかと思ひなされる位なのがびゆうと來る。先頭の連中はまあよく頑張つて行くなと思はれる位である。どうせ敗け惜しみもあるのだらうが兎に角感心なものである。そしてその中には女も居るのだから凄い。生れて始めてこんな風を突き切る自分としては下の方のキルク櫛や乳香樹やラヴァンド等の林こそ戀しい。疾風とか突風とか云ふ言葉ではとてもその暴威を言表はせない。私しは氣狂ひ風と云ひ度かつた。でもまあ崖に落ちる者もなく小數の落伍者を除いては無事頂上の塔に辿り着けて結構であつた。よくまあマント等が吹き飛ばされなかつたことだ。

塔はマドロックの塔（Tour de Madeloch）と稱せられ標高六二五米、一名「惡魔の塔」（T. du Diable）とも呼ばれてゐる。簡單な建築の望樓で勿論防禦用のものである。塔上の景色は善いには善いが此の風では落着いて見てゐる譯に行かぬ。皆んな寒さうに樓內や防壁の蔭に身を縮めて後尾部隊の到着を待つて居る。

歸路をポール・ヴァンドルの方にとる。矢張り風は依然强いのだが昇りよりは增しである。唯大分疲れてゐるので足許が危くないこともない。腰が非常に浮くもので。然し下るに從つて風も弱く大分樂になる。同行の西班牙バルセロナの敎授ポー・ヴィラ氏（Pau Vila）や佛蘭西人の女學生某小學校の先生等と話し話し降ることが出來る位になつた。

此の途には所々に砦があり之れが要塞に利用せられてゐるらしい。實際兵隊らしいのが住んで居るから。大した重要性を持たぬが矢張西班牙に對するものであらう。

途中で近道をして直接ポール・ヴァンドル驛の背後に降り鐵路を横切つて驛に入る。風は全く無いので身體が船から降りた時の樣にふらふらゆれる感じがする。そして誰も彼も唇や頰が風燒けで炎症を起して居る。實際風燒けなんて不思議なものだと思つた。（翌日は段々皮膚が脫げ出した）

西班牙の先生ヴィラ氏は此所で愛相よく皆と分れ一足先きに南に歸り、吾等は豫定の汽車には遲れたがやつと七時二十五分發で此の美しきヴェルメーユの海岸（Vermeille）を去つた。

八時半ペルピニャンに歸り二十五粁を踏破した空腹を學校の夕食に醫し食後はキャフェ（Café de la France）で閑談し署名を交換したり等して十一時ホテルに歸る。

四月七日、日曜日。六時半起床と云ふ豫定であるが我々はホテルに宿つてゐるので五時にはもう起床してゐた。宿の支拂を濟ませて中學校に至り一行と共に朝食。

七時五十二分ペルピニャン發八時五十五分バルカレ（Barcarès）着、マス・ド・リル（Mas de l'Ile）に於ける農業開發を見る。

此所はサルセ（Salces）の潟湖と海との間の砂地で此の事業は飛砂に對する人間の征服を示してゐるとは言へ、殆んど投機にも等しいもので少しでも油斷をすれば危いもんだと考へられ

る。それ丈け興味ある事業でもある。それを態々巴里から見に來て呉れたからと言ふのでもあらう事業主のボカール氏（Boccart）が大變な款待をして下さる。

ボカール氏の二階の一寸講堂の樣な室でベルピニャンの教授ローラン氏（Laurent）の此の地の自然條件に關する講話があり休憩しながら聽く。此の室には日本の錦繪の複寫が飾られてゐたが、こんな田舍に迄と思ふと多少不思議な位然し懷しい感じがした。バルコニーから見た低平な砂地の景色も萬更では無い。

農園を見る。要點は砂除垣の施設と灌漑の方法とにある。砂除垣に就いては大して珍らしいこともない、葦の樣なもので要所々々に垣を造つてゐる位である。灌漑に就いては地表水を求めることが出來ないので地下水に依つてゐる。鑿井をしてそれを必要に應じて霧吹式に撒水してゐるのである。利口な考へであるが、耕地に導水管を配置するのには可なりの資本が入用であらう。但し一本の導管が左右に回轉して兩側に撒水出來る樣に資本の經濟にも考慮を拂つてはゐる。豌豆、蠶豆（ソラマメ）等が栽培されてゐる。

天氣はよく畑からは遙かに白雪を戴いたカニグの山が見える。容姿中々に端麗で、その雪溶けは貴い灌漑水を供するのでピレネーの農民達は一種の宗教心すら之れに捧げると言はれるが未だ富士山を見たことのない巴里の學生達は富士も又こんな山であらうと思つてか「モン・フジ、あー」〳〵と言ふ。富士山もあんなでしようねと言ふ意味らしい。

歸るとボカール氏が食前の酒を振舞はれる。到底も美味いバニュール（Banyuls）の銘酒だ。一杯ぢや滿足しない連中が多い。容器ごとの振舞であるから遠慮なく重ねるあつかましいのも居る。松林の砂に腰を落着けたのも居る。

散々食慾を出さして置いて晝餐の御馳走と來た。實は豫定では冷食の中食となつてゐたのに此の始末だ。皆の顏は陽氣に輝いた。到々バル

カレーの濱に面した料亭に案内せられて田舍式ながら中々の美味に有ついた。日曜日で土地の宴會があつたが不意の愉快な闖入者の數と陽氣さに滿座の田舍人は驚いたらしい。腹加減もよし料理の鹽梅もよし、此の中食の美味かつたこと！　厚くボカール氏に感謝する次第である。

家の構造が知り度くもあつたので便所をかりる。裏庭を隔てて母屋の外にある。野趣豐かなもんだ。

來がけに吾々のために自動車を提供して呉れたボカール氏は再び吾等を自動車で送つて下さる。何處まで親切な人なんだらう。

二時四十分ペルピニャン中學校に歸ることが出來た。

明るいペルピニャンの町にも別れる時が來た。吾等は間もなくツールーズ行列車中の人となつた。車窓より、リウカート(Leucate)の潟湖など沼地の多い荒地を眺めオードの谷の葡萄畑を横ぎりナルボン(Narbonne)、カルカッソンヌ(カルカッソンヌよさよなら)を經て七時八分ツールーズ着。ビュフェーで夕食を濟ませ八時二十三分再びツールーズを去る。途中下車の出來なかつたのは殘念であるが、勝手が利かぬ。唯此所の教授を父に持つピレネーの研究家ドレーシュ君は當然此所で下車して歸省した。皆厚く彼れが東路の勞を謝したのである。

ツールーズからの急行列車では和蘭人の留學生某君が盛んに渴を覺えてビールを欲しがつたことや、席不足で學生等が二等車に侵入して他の乘客との間に口論の始まりかけたことやその乘客が和蘭人を痛烈に攻擊したに拘らず、沈默の日本人を尊敬と同情の眼を以て見たことなどの外には大した挿話もなく九時十七分無事巴里に着く。親心は何處も同じだ、或る令孃の美しい上品な母親など驛迄出迎へに來てゐた人もあつた位である。別れるのは詰らないと言つた然し暖い家庭に歸るのでやれやれしたと言つた、さよならを交して分れ別れ家路につく。愉快だ

つたピレネー路の生新らしい追憶を御土産にして。（昭和七年二月二十九日稿了）

伊太利ところぐ（二六）

瀧川規一

【フロレンスで有名な掘出し物】爽快なる初夏は既に過ぎて夕涼を漸く悦ぶ六月下旬サン・ロレンツオ寺前のピアッツアを彷徨ふ。廣場はこの寺とリカルヂ一家のパラッツオの間にあり邸宅前の階段は古物市の出し店に利用されて居る。着ふるしの衣類古道具や家具をはじめ、がらくた同様の骨董品が弘法さんの畫市そのまゝで觀客を呼んでゐる。骨董品では額縁（ブチ）・鏡架・ブロンズ製の天使の首・近代の繪畫・裸體の習作・黒玉・角礫・斑石等の寶石類、素燒の胸像・絨緞類等數へ得ぬ程雜然と並べられ而かもどれもこれも完全なのがない。斯んながらくた物のなかに不圖目に留つたのが羊皮の表紙のついた古く黄ばんだ一冊子である。他に書物としては拔萃書があり、アレキザンダ・ヂューマの小説ラ・ダーム・オー・カメリア（La Dame aux Camellias）もあり教科書となつたホレース（Horace）その他何々上人の奇蹟傳記を書いたものが幾冊もあつた。然しこの古びた小冊子に心を惹かれ値段を聞くと一リラと云ふのである。今日の爲替相場にして六七十錢のものである。早速代價を拂つた。冊子は小四折形の大さで一部分は印刷してあり一部分は書いてある。この小冊子を手にし降り段附近の立像近くにある噴水を圍む欄干に暫時凭れて内容を讀んで見る。噴水の邊に居た足首の太い伊太利娘にも商人にも